

1. 地形名称を正しく使うことが防災の第一歩

「地形」は単に土地の形というだけにあらず！地形名称を正しく使い、その生い立ちや土地条件を正しく理解しよう。それが防災への最短距離なのです。

わたしたちは日々の暮らしのなかで、自分たちがどのような地形のところで生活しているかをあまり意識していないように思います。特に都会では地形の起伏よりも建物の高さの方が大きい所もあって、土地条件を考えてみることなど、ほとんどないように思います。しかし、ひとたび自然災害が起これば、ここはそんな場所だったのか、とあらためて気づかされます。集中豪雨の際に周囲から水が集まるところ、常習的に水害が発生するところ、土砂災害が発生するところ、液状化が集中して発生するところ、そして地震時に揺れが大きいといわれるところなど、これらはそれぞれの土地の地形条件が深く関わっているのです。

その場所がどのようなところかを示すときに、わたしたちは地形名称を用います。自然災害と土地との関係や自然災害に対するさまざまな対応を考える場合には、地形名称はそれぞれの場所が単にどのような地形であるかということを示しているだけでなく、その場所が自然災害に対してどのような特性を持っているか、また、それぞれの場所ではどのような対応が必要であるのかといった土地の性質をはっきりと示したのものであるのです。たとえば、沖積平野における自然堤防(3. および 4.)と旧河道(5.)はいずれも河川がつくった地形ですが、両者は形態的な特徴が異なるだけでなく、自然災害に対する特性も大きく異なっているのです。

つまり、地形が単なる土地の形ということだけでなく、さまざまな生い立ちを持って現在に至った自然の産物であり、その結果として自然災害に対する特性も異なるということを認識することが重要です。地形と地形を構成する堆積物は多様な特性を持っているので、地形を知ることは土地条件を知ることにほかなりません。そして、それぞれの地形に対して正しい地形名称を使わなければ、その土地条件について間違った認識を持ちかねません。正しい地形名称を使い、それぞれの地形のもつ特性を知っておくことは、防災という観点からもたいへん重要なことなのです。

(海津正倫)